

偶有性への触発—— D.H.
ロレンスとキメラの象徴——

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-10-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井出, 達郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24279

偶有性への触発

——D.H. ロレンスとキメラの象徴¹

井 出 達 郎

はじめに

すでに多くを論じられてきた D.H. ロレンスにおける「接触」という主題は、高村峰生が『触れることのモダニティ——ロレンス、スティーグリッツ、ベンヤミン、メルロ＝ポンティ』において詳細に論じているように、単に身体的な問題ではなく、同時代の社会状況とも密接に関連するものとしてあるが、その問題のひとつとして、近代の個人主義への批判を挙げることができる。エッセイ「我々は互いを必要とする」でロレンスは、近代が重視してきた個人主義を批判し、互いが互いを必要としているという関係の重要性を、接触の問題として論じている。その主張は一見すると、「他から切り離された個人を乗り越えるために他者と触れ合うべき」といった、極めて素朴な図式を思わせてしまう。だがロレンスのエッセイは、孤独な個人か他者との結びつきかといった、単純な二項対立には決してなっていない。ロレンスのエッセイを真に特徴づけるのは、そこで提示されている、接触を通じてこそ「真の個性 (true individuality)」(“We” 299) が達成さ

¹ 本稿は、2018年6月30日に開かれた日本ロレンス協会第49回全国大会でのシンポジウム「ロレンスに触れる——象徴、劇場、写真」内の口頭発表「偶有性への触発——D.H. ロレンスとキメラの象徴」の発表原稿をもとに、加筆修正したものである。

偶有性への触発

れるという、それだけ見れば矛盾にしか思えない主張である。つまりロレンスにとって接触とは、単純な一体化や結合ではなく、個人主義を乗り越えつつ、同時に真の個性を獲得する契機となっている。

本稿は、ロレンス自身が「重要かつ厄介な事実」(“We” 298)と認めるこの独自の問題が、後期の作品群——エッセイ「我々は互いを必要とする」および『黙示録論』、旅行記『エトルリアの故地』、小説『羽鱗の蛇』——に繰り返し現れる、キメラの象徴を通して探求されていることを論じる。キメラとは、自身の内において異なるもの同士を接触させる線を孕んだ存在として、それ自体が接触という主題と不可分の関係にある。だがさらにロレンス作品に特異なのは、それが単純な一体化や結合といった固定した構造の表現ではなく、個体が個体としての輪郭を備えつつ、同時に「他でありうる」という感覚を呼び起こすものとして描かれている点にある。この個体でありながら他でありうるという感覚は、近年注目されている「偶有性」という存在のあり方、そしてロレンスが独自に用いている「象徴」という言葉の意味と極めて強く共振しながら、ロレンスが提示しようとしている真の個性の根幹を成している。ロレンスによってキメラという象徴は、ロレンス独自の接触の問題に対し、文字通り、その偶有性を触発するものとしてある。

1. ロレンスの接触をめぐる先行研究

——外との接触から内なる接触へ

ロレンス作品に接触というモチーフが繰り返し現れるのは、すでにロレンス研究の一つの基本了解とさえいってよいほど、これまでに盛んに論じられてきた。第一に、もともとロレンスという作家は、一般的にも『チャ

タレー夫人の恋人』をめぐる論争で有名なように、性的なものや身体的なものを前景化する傾向は確かにあり、接触というモチーフもその文脈で解釈されることが多い。例えば、ロレンス研究を網羅的にまとめた『ロレンス文学鑑賞事典』では、ロレンスの短編群を分類するひとつのカテゴリーとして「接触物語」を挙げ、それが「肉体的な触れ合いを通して人々がお互いに親密な関係を築き上げる必要性」（大平 110）をうったえかけるものであると説明している。加えてロレンスの接触の主題を豊かにしているのが、それが性や身体という問題ばかりでなく、社会、文化、政治など、大きな問題へと幅広くつながっていくことだ。西欧の視覚優位の思想を背景にした科学技術の発展、第一次世界大戦を契機とした分離や孤独の感覚、イタリア・ファシズムなど、性や身体という問題からみればいささか古くも思える接触という主題は、今なおロレンス研究に豊富な話題を提供し続けている²。

すでにある豊富な先行研究に対して本稿が新たに提示したいのは、まずはロレンスの接触が個人主義への批判であることを確認したうえで、それが単に自己の外との接触だけではなくて、内なる接触というものまで及んでいる、という視点である。一般的に接触とは、異なる二つの個体の間で起こる出来事として了解されている。このあまりに当然ともいえる前提からすれば、例えば、この主題を論じる一人のジェーン・コスティンが、ロレンスの接触の目的について、「人々の間やその周囲の状況との共感的なつながりを活性化することで世界を活性化させること」（Costin 32）と表

² モダニズム期の科学技術の発展との関連については Abbie Garrington, *Haptic Modernism: Touch and the Tactile in Modernist Writing* を参照。第一次世界大戦との関連については Santanu Das, *Touch and Intimacy in First World War Literature* および Jane Costin, “A Sense of Touch: Henry Moore and D.H. Lawrence” を参照。イタリア・ファシズムとの関連については高村峰生『触れることのモダニティ——ロレンス、スティーグリッツ、ベンヤミン、メルロ＝ポンティ』を参照。

現していることに、特に疑問が生じる余地はないだろう。だがロレンスの接触とは、決して二つの個体の中で起こる出来事、「人々」や「周囲」との間で起こる出来事、すなわち外との接触に限定されたものではない。キャスリン・A・ウォルターシャイドが示唆しているように、接触とは、自身との間にも生じる出来事でもありうる³。ロレンスが繰り返し惹かれ続けるキメラという存在は、ロレンスにとってその出来事が、特に個体それ自体の内にも生じることを示す。本稿のねらいは、キメラの象徴からその内なる接触を浮き彫りにすることで、ロレンスの接触をめぐる先行研究を発展させることである。

2. エッセイ「我々は互いを必要とする」

——接触、偶有性としての真の個性、キメラとしての“wo/mem”

ロレンスの接触という主題が個人主義への批判としてあり、それが偶有性という存在のあり方、そしてキメラの象徴へと接続されていくことは、まず、エッセイ「我々は互いを必要とする」から凝縮したかたちで読み取ることができる。

「我々は次のことを認めた方がよい。男と女は互いを必要とする」(“We” 296) という宣言で始まるこのエッセイは、エゴイズムに基づいた個人主義を批判しながら、それを接触の問題として論じていく。ここでもまた、ロレンスの論じる接触が、孤独になってしまった近代的な個人に対し、「肉体的な触れ合いを通して人々がお互いに親密な関係を築き上げる必要性」(大平 110) を提示する手段となっているのは確かである。だがこのエッ

³ Kathryn A. Waterscheid, *The Resurrection of the Body: Touch in D.H. Lawrence* の 2-3 頁を参照。

偶有性への触発

セイを何よりも特徴づけているのは、そこで言われている接触とは、個性それ自体の否定というよりも、むしろ逆に、ロレンスが言うところの「真の個性」をもたらすためのものとされている点にある。接触こそが真の個性をもたらすという主張は、次のような文から明確に見てとることができる。「人々が真の個性と他から区別される存在を有するのはお互いの関係においてにはかならない。触れ合うことにおいてであり、触れ合うことなしには不可能である」(“We” 299)、「男と女、両者の偉大でとらえがたい関係。この関係において、そしてこの関係を通してこそ、われわれは本物の個性を持つに至る。それなしでは、その本物の接触なしでは、われわれは存在していないのも同じである」(“We” 299)。ロレンスにとって接触とは、個人主義に対置されるような単純な他者との結びつきといったものではない。接触とは、何よりも真の個性へと到るためのものとしてある。

では、ロレンスがいう真の個性とは具体的にどのようなものなのか。この問いに対して本稿が提示するのが、「他でありえる」という可能性を含んだ存在のあり方、というものである。「他でありうる」という可能性は、通常イメージされる「個性 (individual)」という概念と、極めて根本的な齟齬をきたすように思われるかもしれない。だがそれは、その特異性そのままに、このエッセイにおいて奇妙な文章として現れる。一見するとロレンスの論調は、まずは個人主義への批判という論旨を「われわれ (we)」という代名詞によってわかりやすく表現したうえで、「男 (men)」と「女 (women)」を個人の比喩として用い、両者がともに触れ合うべきである、という極めて単純な図式に還元してしまいたくなる。だがそれを説明しようとするロレンスの次の文章は、そうした単純な図式に収めることのできない、奇妙な余剰を含んでいる。「生気に満ちた男は特定の女との関係なしにはありえない。ただし、むしろ、男が他の男に女性の役割を演じさせ

ない限りは (unless, of course, he makes another man play the rôle of woman) ("We" 296)。ここでロレンスは、「男は女との関係なしには存在しない」という、個人主義への批判のためならそれだけで十分なはずの言葉に、「他の男に女性の役割を演じさせない限りは」という奇妙な条件をつけている。同様の言明は、文字通り、男と女を入れ替えたかたちでもなされる。「活力に満ちた女は男との親密な関係なしにはありえない。ただし、女が他の女を男の代わりにしない限りは (unless she substitutes some other woman for the man) ("We" 296)。この奇妙な条件を単なるロレンスのユーモアだと簡単に片付けることはできないだろう。なぜなら、ここでロレンスが条件を示すために用いている unless とは、動詞が現在形のままであることに示されるように、現実離れた仮定法ではなく、実際に起こりうる条件を述べる用法であるからだ。少なくとも文それ自体だけをとりあげれば、ロレンスが individual の比喩として用いている「男」と「女」とは、それが individual の比喩であると同時に、それぞれが「他でありうる」という可能性を現実のものとして帯びている。

この「他でありうる」という可能性は、それだけみれば、ロレンスがエッセイであからさまに論じている接触のモチーフと、全く無関係にしか思えないかもしれない。だが両者は、現代の社会学において注目されている一つ概念、「偶有性 (contingency)」という概念を補助線にすると、その確かなつながりを確認することができる。もともと偶有性とは、「必然性と不可能性の双方の否定によって定義できる様相 (可能だが必然ではない)」(『自由』102) を指す哲学用語としてあるが、その「他でもありえた」という感覚、特に、「自分が誰か別のものでもありえた」という感覚は、震災後に生き残ってしまったことへの罪悪感、犯罪者の自己責任、安楽死や自分の身体をめぐる決定権など、現代の様々な社会問題を考えるうえで

の重要な参照点となっている⁴。この概念が「接触」を論じる本稿にとって示唆的なのは、この英語の *contingency* という語が、フランスの哲学者ミシェル・セールが指摘しているように、「ともに (con)」と「触れること (tingency)」という語源から成り立っているということである⁵。なぜ「ともに」「触れること」が「他でもありえた」という感覚を意味するものになるのか。この問いに対して極めて有益な視点を提供しているのが、社会学者の大澤真幸の接触についての考察である。大澤は、自分が他の誰でもない自分であると感じる心の動きを求心化作用、逆に、他人が自分という存在に決して回収できない他人であると感じる心の動きを遠心化作用と呼びながら、触れ合うという状態を特徴づけるのは、何よりも二つの作用の反転にあると論じている。大澤によれば、「求心化作用と遠心化作用との表裏一体性を典型的に示すのが、触覚である。そこでは、触れること——この身体に能動性があること（求心化作用）——が、同時に触れられること——この身体があちら側の能動性にとって対象であること（遠心化作用）——でもあるからだ」（『自由』20）。それゆえ、「触れることと触れられることは可逆的であり、触れることはただちに触れられること（あちら側が触れること）へと転換してしまう」（『自由』21）。大澤が論じる「触れる」と「触れられる」の関係の反転は、*contingency* という語が接触の意味を内包し、そのうえで「他でもありえた」という感覚を意味することへの、説得力のある説明になっている。その意味で、ロレンスが提示する接触を通して到達すべき真の個性とは、「男」が「女」でありうる、また「女」が「男」でありうるという感覚に注目したとき、偶有性という語の語源と意味に、極めて正確に重なり合うことになる。

⁴ 大澤真幸『自由という牢獄——責任・公共性・資本主義』を参照。

⁵ Michel Serres, *The Five Senses: A Philosophy of Mingled Bodies* の 80 頁を参照。

偶有性としての真の個性という発想は、英語の *individual* が「分ける (*divide*)」ことが「不可能 (*in-*)」であるという意味によって成り立っていることを踏まえれば、少なくとも英語という言語を用いて論じるには、ロレンスの言葉通り、「厄介な事実」となるほかない。事実、この問題を論じるロレンスの文章は、ロレンスの他の多くのエッセイと同様に、論理的には矛盾した印象を与える。だがこのエッセイが興味深いのは、ロレンスがこの問題をめぐって、言葉の意味とは別の次元による探究の仕方をほのめかしていることである。そもそもロレンスは、なぜ *we* の構成要素たる *individual* の比喩に *men* と *women* という語を用いているのか。二つの比喩は、たとえば、ごく単純に *you* と *I* という代名詞を用いたり、あるいは、「西洋人」と「東洋人」といった別の二項対立を用いたりすることもできたはずである。この問いに対して本稿が目したいのは、*men* と *women* というこの二語が、言葉の意味とは別に、その見た目において、極めてキメラ的な関係を備えている、ということである。武藤浩史は、ロレンスの長編小説『恋する女たち (*Women in Love*)』のタイトルについて、*women* という語の中に *men* という語が隠れていることに言及しているが、それは、*women* と *men* がキメラ的に接続されているとも言い換えることができる⁶。すなわち、*men* と *women* という語とは、*wo/men* として互いに接触しつつ、同時にそれが単純な結合ではなく、どちらにも成りうる可能性を示す様相を呈するものにもなっている、ということである。自身のうちに個を分節しながら接続し、かつその二者が接触の中で「他でありえた」という偶有性を、意味の次元とは別のところで表現していること、*men* と *women* の比喩とは、こうしたキメラ的な関係への可能性を触発させる

⁶ 武藤浩史 「「チャタレー夫人の恋人」と身体知——精読から生の動きの学びへ」の48頁を参照。

ものとしてある。

3. 「黙示録論」—— 偶有性としての「象徴」

接触を通して至る真の個性とは偶有性を備えた存在でありながら、そのような真の個性は、個性を *individual*、すなわち「分割できないもの」と表現する英語では説明できないこと、それゆえに言葉とは異なる探求のあり方が要請されること、エッセイ「我々は必互いを必要とする」において示されていた *men* と *women* という比喩は、その異なる探求のあり方がキメラという存在と関わることを示唆していた。それは、キメラという存在のあり方に加えて、ロレンスが独自の意味を用いている「象徴」というあり方とも強く共振している。英語の論説調エッセイでは表現が困難な偶有性を孕んだ真の個性を、ロレンスは独自の象徴の意味でもって、「キメラの象徴」として探求していく。

ロレンスにとって「象徴」とは何か。それは、本稿がここまで述べてきた偶有性と正確に呼応する、「他でありうる」という可能性そのものである。このロレンスの独自の象徴についての考えは、エッセイ『黙示録論』から読み取ることができる。『黙示録論』の中でロレンスは、古代人が言葉ではない目に見える映像に基づいた叡智を持っていたと述べ、意識を固定的な意味に回収してしまう思考法を「寓話」的と呼びながら非難し、それに正確に対照させるかたちで「象徴」の「説明のできなさ」を讃える。ロレンスにとって、「寓話は常に説明されうる。説明されつくされてしまう」(*Apocalypse* 142)。対して、「真の象徴はあらゆる説明に抗う」(*Apocalypse* 142)。この象徴についてのロレンスの考えは、一般的な「象徴 (symbol)」の考え方とは正反対とっていいほど、決定的に独自のものになっている。

一般的に象徴とは、例えば「鳩は平和の象徴である (The dove is a symbol of peace)」という例文にみるように、何かの「代わりを表す (represent)」ものであると了解されている⁷。それは、たとえば例文の場合であれば、「鳩」と「平和」という二物がイコールの関係に固定されている、ということである。ロレンスにとっての象徴とは、そうした固定化した関係では全くない。哲学者のジル・ドゥルーズは、ロレンス自身と同様に寓意との対照を強調させながら、ロレンスの象徴の独自性を次のように説明する。「それは拡大、掘り下げ、つまり感覚的意識の拡張のためのダイナミックな手法だし、寓意的な固定観念についての道徳的意識の閉鎖とは対極的で、どんどん意識化されていく生成である」(ドゥルーズ 103)。ここでドゥルーズが「生成」と説明しているように、ロレンスのいう象徴とは、固定を前提とした一般的な象徴とは全く異なるものである。それは、絶え間なく「他になりうる」可能性を含んだもの、偶有性への触発そのものとしてある。

では、そのような意味でのロレンス独自の象徴とは、具体的にどのようなものなのか。ここで出てくるのが、まさにキメラという象徴にはかならない。『黙示録論』の中で象徴について論じていくロレンスは、その具体例として、「スフィンクスの謎」の例に言及する。いわゆる「初めのうちは四足で、つぎは二本足になり、最後に三本足で歩くものは何か」というよく知られる謎であるが、この答えを「人間」としてしまうことを、ロレンスはつまらない批評家になってしまった現代人の病として公然と非難する。ロレンス自身の言い方をそのまま用いれば、それは意味を固定してしまう「寓意」的な解釈でしかないためだ。ロレンスはスフィンクスという象徴をめぐり、古代人こそが象徴を(ロレンス的な)象徴として受け入れ

⁷ Longman Dictionary of Contemporary English の “symbol” の項目を参照。

ていたとしつつ、「批評家たる現代人とは違い、イメージを直感していた古代人においては、感情と畏怖との混合体こそがそこから生み出された」(*Apocalypse* 92)といささか分かりにくい言い方をしているが、ロレンスの説明は、再びドゥルーズの解説によって補うことで、ここまで述べてきた「他でありうる」というあり方として理解することができる。

三つの部分が連鎖されていて、最終的な答えは人間になると見てとると、この質問はむしろ愚かなものになってしまう。逆に、三つのイメージのグループ、子ども＝動物というイメージ、ついで猿だとか、鳥だとか、蛙といった二本足の被造物のイメージ、そして海や砂漠の彼方にある三本足の獣のイメージが、人間という最も神秘的な点の周囲を旋回していると感じ取ると、例の質問が生き生きとしてくる。まさにこれが回転式の象徴なのだ。始まりも終わりもなく、われわれをどこにも導かず、終止符などは絶対になく、段階すらもない。(ドゥルーズ 104)

ロレンスにとっての象徴とは、「スフィンクスの謎＝人間」といった固定的な意味のつながりではない。そうではなく、ある個体が「他でありうる」こと促す「ダイナミックな手法」なのである。

さらに本稿の文脈で注目したいのは、この「他でありうる」象徴を提示するものが、ほかならないスフィンクスである点、すなわち、人間とライオンのキメラであるという点である。それはまさしく、エッセイの *wo/ men* でみたように、自身のうちに個を分かち線分を含んでいるという点で、接触という主題にそのまま密接に関連している。キメラとしてのスフィンクスがロレンス独自の象徴を提示する存在であることは、そのままロレンスにとってのキメラという象徴の特異性を示しているといってよい。それは、単に人間とライオンという二つの個体の単純な結合ではなく、接触を通して到達されるべき「真の個」、他でありうる偶有性を孕んだ個性であ

ることを強烈に喚起させている。

4. 旅行記『エトルリアの故地』——偶有性としてのキメラの象徴

偶有性を含んだ真の個性としてのキメラの象徴が明白なかたちで描かれるのが、ロレンスの旅行記のひとつである『エトルリアの故地』である。旅行記はまず、キメラの象徴が改めて接触の主題を孕んでいることを、わかりやすく再確認させてくれる。全7章中2章分を締める「タルキニアの壁画」と題された章においてロレンスは、壁画の一つに奇妙な動物、すなわち、獅子の頭を持ちながら同時に山羊の尻尾を持つキメラ的な動物を発見し、その感動を次のように述べる。

それは素晴らしい世界に違いない。あらゆるものが触れ合う黄昏の光の中で、すべてが生き生きとして、輝いている世界。昼の光で照らされた、単なる区別された個体とは違う。そこでは各々が視覚的に明確な輪郭を持っている。しかしその明確さのなかで、感情の次元で、あるいは生命の次元で、自分ではない他なるものと関係し、あるものは別のものから生み出され、心情において矛盾しているものも、感情において融合していく。
(*Etruscan* 124)

一方でロレンスは、キメラという存在から直ちにあらゆるものが接触している、という世界のあり方を思い描く。だがその世界は、単純な結合や一体化では決してない。他方でロレンスは、キメラという存在に必然的に含まれる「線」が、ある一つの個体の明確な「輪郭」となることをはっきりと感じとっている。すなわちロレンスにとってキメラとは、一つひとつの個体が明確に区別され、その上で互いが接触しているという状態を思い起こさせるものとしてある。

ロレンスがキメラから読み取るこの接触の主題は、「他でありうる」という偶有性を備えたロレンス独自の象徴のあり方にそのまま接続される。先の感想に続いてロレンスは次のように述べる。「獅子は同じ瞬間において山羊でもありえた、そして山羊でもないものでもありえた (a lion could be at the same moment also a goat, and not a goat)」(Etruscan 124)。ここには、ロレンス自身が寓話と対照させた独自の象徴のあり方をそのまま見ることができよう。ロレンスにとってキメラとは、「AでもありBでもある」という静的な混合体では決してない。ロレンスはここで、「一匹の獅子が一匹の山羊でもありえた」という他でありえたという可能性を壁画から引き出している。そしてさらに重要なことに、「獅子でも山羊でもないものでもありえた」という可能性までもみとっている。つまりロレンスにとってキメラとは、「AかBか」という二者択一の状態にとどまるものにはなっていない。それは、固定的な説明にどこまでも抗うもの、すなわち、ロレンス独自の象徴をその正確な意味において体現するものである。明確な縁取りをもった一つの個でありながら、それが「AでもBでもありえ、かつBでもないこともありえた」という可能性を備えていること、ロレンスにとってキメラの象徴は、接触という感覚を鋭く喚起させながら、偶発性そのものを触発させる。

5. 『羽鱗の蛇』——真の個性としての偶有性の困難と positive passivity

キメラの象徴を通して探求される「他でありうる」という感覚をともなった偶有性としての真の個性とは、しかし、大きな疑問点を孕んでいることも確かである。再び象徴についてのロレンス自身の説明をひけば、ロレンスにとって象徴とは、「他でありうる」という可能性そのものであり、そ

れはすなわち、説明によって意味が固定化されてしまう寓話とは異なり、「どこへも到達しないもの」、「到達すべき目的地がないもの」(Apocalypse 91)である。ここには、特に近代以降の「個人(individual)」の絶対的な条件である、自らの能動的な意志を完全が欠落しているように思えてしまう。もし目的地がないのであれば、目的を「決める」という能動的な行為そのもの、そうした能動的な行為そのものを行うはずの存在の必要性がないからだ。それゆえ、偶有性を孕んだ個性とは、任意の個体の特性が恣意的に決定されているという状態にすぎず、むしろ「個性」という感覚が解体されている状態、あまりにも受動的な状態にみえてしまう面があることは確かである⁸。この問いに対して本稿は、まさにその問題に取り組んだのが、ケツアルコアトルというキメラを主題とした小説『羽鱗の蛇』であり、そしてこの作品が、接触というモチーフの中から偶有性を含んだ個性というあり方を探求する中で、通常の意味での能動／受動の区分では捉えきれない個のあり方、作中の言葉でいう「能動的な受動態(positive passivity)」という状態の個のあり方を描いている、という解を提示する。

『羽鱗の蛇』は、西欧世界に属するケイト・レズリーとメキシコの先住民であるドン・シプリアーノとの結婚が主要な筋をなす物語であるが、その展開は、これまで述べてきた接触の問題をそのまま反復している。シプリアーノと知り合ったケイトは当初、褐色の肌をした人との接触はしないと断言しながら、シプリアーノを目の前にし、彼との接触が何よりも価値があるものなのではないか、という思いに囚われる。

「触れ合うことはありえないと感じるのか？」彼は言った、率直に。

⁸ この偶有性と個性をめぐる関係の困難さについては、本稿の元となったシンポジウムにて、講師の一人である高村峰生氏からの指摘による。

偶有性への触発

「ええ！」彼女は言った。「そうよ」

「ならお前の感じる通りに」彼は言った。

彼がそう言ったとき、彼女は、自分にとって彼がどんな金髪の白人よりも美しいことを知っていた。そして、意識の遠く、深いところで、彼との触れ合いがこれまで知り得たどんな触れ合いよりも、もっと価値あるものであることも。(Plumed 170)

このケイトの心情からは、ケイトとシプリアーノの結婚という筋が、そのまま接触の問題となっていることが読みとれる。そして彼女はシプリアーノを知るにつれ、彼の宗教の象徴たるケツアルコアトル、すなわち、アステカ族が霊鳥とした鳥の名である「ケツアル」と、蛇を意味する「コアトル」という、空を飛ぶものと地を這うものという、矛盾を内包したキメラの象徴に惹かれていく。このとき、ケイトがシプリアーノに見つめられる場面において、ケイトが自分を「鳥」に、シプリアーノを「蛇」に喩えていることは、彼らにとっての接触／結婚が、そのままケツアルコアトルというキメラの象徴とも不可分の関係にあることをわかりやすく伝えている。そしてやはり、このキメラの象徴を伴った接触／結婚は、彼らを偶有性としての個性へ導いていく。ケイトがシプリアーノとの結婚を決意し、教会で手を握り合う次の場面において、ケイトはシチリアーノとの接触を感じながら、シプリアーノがアステカ族の神であるウィツイポチトリに、自分がその花嫁の女神であるマリンチへと変わるのを感じ取る。「思春期を迎えたばかりの少女のように彼女はここに座ったままだ。生きているウィツイポチトリ！ おお、彼は確かに生きているウィツイポチトリなのだ。他の何ものにもましてウィツイポチトリだった。そして彼女は女神の花嫁、緑のドレスのマリンチだった」(Plumed 357)。このようにケイトとシプリアーノをめぐる結婚の物語は、キメラの象徴を伴った接触を通じて、

偶有性としての真の個性に向けられていく。

この接触の中で、ケイトが個性としての力、特に英語の *individual* からイメージされる能動的な意志の力が解体されていくように見えるのは確かである。特に、シプリアーノとの結婚生活に入った彼女の状態について、語り手が「受動態 (*passivity*)」という表現を当てはめていることは、その印象を強くしている。しかしここで見逃せないのは、そこで語り手が使用する *passivity* という語が、例えば次の文に見られるように、いささか奇妙な使われ方をしている点である。「奇妙で、重たい、能動的な受動態。彼女は生まれて初めて完全な休息状態にあった (*The strange, heavy, positive passivity. For the first time in her life she felt absolutely at rest*)」(*Plumed* 421)。原文でもイタリックで強調されているこの *positive passivity* という状態は、引用部の最後の *absolutely at rest* という表現にあるように、「完全な受動態」という意味にも受けとれ、個体たるものがどこにもないかのような印象を与えるだろう。しかしその一方で、ここでその受動態を形容している *positive* という語が、もともと「肯定的な、積極的な」という意味を持っているという事実を無視することはできない。日本語訳者である宮西豊逸も、この語を「能動的な受動的生態」という、表面上は矛盾を孕んだ表現で訳している。そもそも、小説の主題となっているケツァルコアトルというキメラの象徴自体が矛盾を孕んでおり、その矛盾との対峙こそが、主人公ケイトの物語の中核をなしている。「意味の矛盾するきらめきの混交、それがケツァルコアトルだった。だが反駁する必要があるうか。彼女のアイランドの魂は、確定されて死んでしまった意味、固定された目的しか持たない神に飽き飽きしていた」(*Plumed* 58)。その意味で *positive passivity* とは、個が解体された一方的な受動態では決してない。それはむしろ、能動と受動という二項対立的な図式では捉えられない個の

あり方こそを示唆している。

事実、接触の相手としてのシチリアーノとの関係の中で、この *positive passivity* は、ケイトに固定化された状態を揺り動かす「力」をもたらすことになる。「そして彼は、暗く、燃えるような沈黙の中で、新しい、柔らかな、重く、熱い流れへと、彼女を戻していった。彼女は、火山の底から音もなく、力強いしなやかさでもって湧き上がる泉のようであった。そして彼女は、柔らかく、熱く、音もなく柔らかな力とともに、自らを彼に開いた (And he, in his dark, hot silence would bring her back to the new, soft, heavy, hot flow, when she was like a fountain gushing noiseless and with urgent softness from the volcanic deeps. Then she was open to him soft and hot, yet gushing with a noiseless soft power) (Plumed 422)。ここでは、それほど長くはない一連の描写において、*soft* という受動態を思われる語が繰り返し現れる。重要なのは、その *soft* なものが一方的に変形を被るのではなく、「重く (*heavy*)」、「熱く (*hot*)」、「ほとばしる (*gushing*)」、ひとつの力 (*power*) として捉えられていることだ。ここには、*soft* という言葉が含意する可塑性を備えながら、しかし一方的に変形を被るだけではない状態、すなわち、一般的にイメージされる「能動態／受動態」という二項対立的な考えでは捉えきれない状態が、*flow* という固定化に抗う動きを多分に含んだものとして提示されている。すなわち、ケイトとシプリアーノとの接触を通して出現するのは、「能動か受動か」という二項対立的な説明にどこまでも抗う個体のあり方なのである⁹。

⁹ 受動態と能動態という区別をめぐる、哲学者の國分功一郎は、そもそも能動／受動という区分が人間にとって普遍的なものなのかという問いを、古典ギリシア語の文法における「中動態」という態から考察し、それが現代における「意志」や「責任」の問題と不可分にあることを解き明かしている。國分の論考は、『羽鱗の蛇』における *positive passivity* という表現に直結するとともに、ロレンスにとっての真の個性が「英語」という言語で説明し難いものであることを考え

偶有性への触発

この能動でも受動でもない positive passivity という個体のあり方は、実のところ、偶有性が接触の意味を伴いながら、「他でありうる」という可能性を意味するというあり方と、極めて正確に合致する。接触という出来事は、何よりも「触れる」と「触れられる」の反転、すなわち、能動と受動の反転にはかならないからだ。ケツアルコアトルというキメラの象徴の物語は、接触としての結婚というメインプロットを媒介にしつつ、positive passivity、宮西訳の表現を借りれば「能動的な受動的生態」という特異な態を前景化させることで、偶有性としての真の個性を触発させている。

結語

ロレンスは接触を、西洋が重視してきた個人主義を克服する重要なモチーフとして繰り返し描き続けた。しかしロレンスに特徴的なのは、その接触による克服が単純な一体化や結合ではなく、むしろ真の個性へと至るという、一見すると矛盾した考えを持っていた点にある。ロレンスにとってその真の個性とは、個という存在を解体するように思えてしまう、「他でありえる」という偶有性の感覚を孕んだものであった。その個性のあり方は、英語という言葉を用いて探求しようとする、必然的に論理的な矛盾を犯すことになる。本稿でも引用し、偶有性を鍵概念に様々な問題に引用している大澤も、「存在することができるという同時に存在しないことができるもの」という様相が、論理的には矛盾律を犯しているように見えることを認めている。そしてまさにそれゆえに、「このような奇妙な存在の真を確保するためには、哲学的にも、またわれわれの意識の上でも自明とされているいくつかの原則の働きを停止させなくてはならない」(『可能』

るうえで、極めて重要な視点を提供している。

402) とし、それが存在論の基礎からの見直しという高度に思弁的な作業と運動している、と述べている。ロレンスのキメラの象徴による探求は、偶有性への触発のための、その困難な作業の実践例のひとつにはかならない。

引用文献

- Costin, Jane. "A Sense of Touch : Henry Moore and D. H. Lawrence." *Études Lawrenciennes*, 46, 2015. DOI : 10.4000/lawrence.243.
- Das, Santanu. *Touch and Intimacy in First World War Literature*. Cambridge UP, 2005.
- Garrington, Abbie. *Haptic Modernism : Touch and the Tactile in Modernist Writing*. Edinburg UP, 2013.
- Lawrence, D.H. *Apocalypse*. 1931. *Apocalypse and the Writings on Revelation*, edited by Mara Kalnins, Cambridge UP, 1980, pp. 57-149.
- . *The Plumed Serpent*. 1926. Edited by L.D. Clark, Cambridge UP, 1987.
- . *Sketches of Etruscan Places*. 1932. *Sketches of Etruscan Places and Other Italian Essays*, edited by Simonetta de Filippis, Cambridge UP, 1992, pp. 1-179.
- . "We Need One Another." 1929. *Late Essays and Articles*, edited by James T. Boulton, Cambridge UP, 2004, pp. 296-302.
- Serres, Michel. *The Five Senses : A Philosophy of Mingled Bodies*. 1985. Translated by Margaret Sankey and Peter Cowley, Continuum, 2008.
- Waterscheid, Kathryn A. *The Resurrection of the Body : Touch in D.H. Lawrence*. Peter Lang, 1994.

大澤真幸『可能なる革命』太田出版、2016年。

———『自由という牢獄——責任・公共性・資本主義』岩波書店、2015年。

大平 章、小田島恒志、加藤英治、橋本清一、武藤浩史編『ロレンス文学鑑賞事典』彩流社、2002年。

國分功一郎『中動態の世界——意志と責任の考古学』医学書院、2017年。

高村峰生『触れることのモダニティ——ロレンス、ステイーグリッツ、ベンヤミン、メルロ＝ポンティ』以文社、2017年。

ジル・ドゥルーズ『批評と臨床』守中高明、谷昌親訳、河出文庫、2010年。

武藤浩史『「チャタレー夫人の恋人」と身体知——精読から生の動きの学びへ』筑摩書房、2010年。

D・H・ロレンス『翼ある蛇』宮西豊逸訳、角川文庫、1963年。

Toward Contingency through Touch : The Symbol of Chimera in D.H. Lawrence's Works

Tatsuro Ide

In his essay "We Need One Another," Lawrence emphasizes the importance of the sense of touch to criticize individualism in the modern age. While his claim seems to be a mere preference for unity with others, what truly characterizes his essay is that he does not reject the idea of individual itself; rather, he argues that contact is necessary for one to have "true individuality," which at first glance appears to be contradictory. In other words, the sense of touch for Lawrence does not mean a simple unification or union, but an opportunity to overcome individualism and at the same time acquire the true individuality.

This paper aims to clarify that D.H. Lawrence's works about the motif of touch explore contingency as what he calls "true individuality" through the symbol of chimera. A chimera per se is closely related with the motif of touch, as a being that contains lines that divide and connect the individual within itself. What is more noticeable to Lawrence's works, however, is that they repeatedly use this symbol not as an expression of a static structure such as a simple unification or union, but as what Gilles Deleuze explains as a "dynamic process" that an individual is exposed to infinite possibilities of becoming others. Resonating strongly with the concept of "contingency," which et-

偶有性への触発

ymologically means “common tangency,” and his own unique idea about “symbol,” the symbol of chimera for Lawrence literally “touches” off contingency as true individuality.